

# 上代人と常世の国

丸 山 林 平

## 一

古事記伝(卷十二)は、常世の語に四つの異なる意義があるとしている。その第一は、「常世長鳴鳥」や「常世思兼神」などの「常世」で、これは「常夜」の義であると言つう。その第二は、古事記(下巻)の「麻比須流袁美邦登許余爾毛加母」、垂仁紀の「伊勢国則常世浪重浪帰国也」、顯宗紀の「拍上賜吾常世等」、また万葉(150)の「我國者常世爾成牟」などの常世で、これは「永久不変」の義であると言つう。第三は、「常世の国」の義で、「さて常世国は、如此名づけたる国の一つあるには非ず、ただ何方にまれ、此の皇国を遙かに隔り離れて、たやすく往還ひがたき処を泛く云ふ名なり。」と説く。そして、第四には、「さて又後には、人の死ぬるを、常世国にゆく」と云ひしことあり。」と述べて、万葉(472三)の「常呼二跡吾行莫国」その他の二例を挙げている。

さて、このような解釈が果たして妥当であるかどうか。第一に、「常世」と「常夜」とが同義であるとするがごときは、記伝の犯した最もひどい誤りの一つであると言わざるを得ない。記伝が、このような誤りを犯したのは、天照大神の岩屋ごもりの段の「常夜往」を「登許用由久」と読んだことに基因する。「常夜」を「トコヨ」

などと読んだ例は上代文献のどこを捜しても見出すことはできず、全く記伝だけの勝手な読みである。書紀は「常闇」「長夜」「恒闇」「常夜」の四種の文字を用いているが、その読みはすべて「トコヤミ」である。また、万葉でも「常闇」であり、「等許也末」であつて、永久の夜のことを「トコヨ」などと読んでいる箇所は一つもない。記伝が「常夜」と「常世」とを同義に解したのは、全く読みの誤りから生じたのであるが、そのために、「常世」に黄泉の国や底つ国や根の国などの暗い意義を持たせる結果を招致してしまつたのである。ところが、記伝のこの誤りは、後の多くの学者によつて、無反省のまゝうけつがれている。たとえば、折口信夫博士や松岡静雄氏などの論調がそれである。

第二の「常世」が「永久不変の義である」とする記伝の説は、とにかく、それでよいと思うが、この「常世」と「常世の国」とを区別するがごときは、ほとんど意味のないことである。いうまでもなく「常世」は「常世の国」の略であり、全く同義である。万葉の浦島子を詠じた歌「かきむすび常世に至り」「常世べにまた歸り来て」「常世べに住むべきものを」その他でも極めて明瞭である。すなわち、「常世長鳴鳥」は、常世の国から来た鶏であり、「常世思兼神」は、常世の国から来た智謀に長けた神であり、万葉(18四〇六三)

の「等許余物已能多知婆奈」は、常世の国から渡来した橘であり、書紀の「わが常世たち」は、富裕であり長寿であるまればとたちの意で、つまり、新築祝いに集まって来た客人たちを祝福して「常世の国の人たち」と呼んだのである。したがって、「トコヨ」も「トコヨクニ」も全く同義である。

第三の「何方にまれ、此の皇国を遙かに隔り離れて、たやすく往還ひがたき処を泛く云ふ名なり」は、正しい説であるが、ただ、記伝が、その地を現実的な地と考えているのは、宣長の時代としては無理もないが、今日から見れば、何人も首肯できないことである。このことに関しては後に述べる。

第四の「人の死ぬるを、常世国にゆくと云ひしことあり」として挙げた三つの例は、いづれも記伝の誤りである。万葉（472三）の「常呼二跡吾行莫国」の「常呼」を「トコヨ」と読むことも無理であるし、大伴坂上郎女が留守宅の大嬢に贈ったこの歌に「死んでゆく」などの意はなく、「常に逢いに行くこともできない」ことを嘆いたものと見るべきで、定本万葉集では「常呼」を「ツネヲ」と読んでいる。記伝の挙げた他の二例は、万葉（91八〇四）の「遠津国黄泉乃界丹」、雄略紀の「不謂、遼病弥留、至三於大漸。」であるが、そのいづれにも「トコヨ」などの読みも意義もないのであって、記伝の強引な勝手な引用でしかない。記伝がこのように考えたのも、要するに「常夜」を「トコヨ」と読んで出発点の誤謬から来たものである。記伝は、あくまで、「常世」に死んでゆく地の意義のあること、黄泉の国、底つ国、根の国などの義のあることを理論づけようとして、「常」と「底」とが同義語であるとし、「国常立尊」と「国底立尊」とが同一神であることなどを挙げている。松岡静雄氏もそれに雷同して、「河底」を「河床」とも言うなどと言っているが、それらは、すべて「常夜」と「常世」とが同一であると

する根本的な誤りから派生した珍説でなければならぬ。

かくて、記伝は最後に、「然るを後の人はただ常世と書ける字に多、又漢の蓬萊などのことをのみ思ひて、上代の意を深く考へざるゆゑに、不変不死を常世国の本の義と心得たるは、ひがごとなり」と結んでいるのであるが、記伝こそ深く考え過ぎて「ひがごと」に終始しているのである。その「ひがごと」は、要するに、文字の誤読と内容の過分析とにある。「トコヨ」の語の意義を四種に分析するなどは、あまりにこだわらず、あまりにうるさいことである。結局、「トコヨ」または「トコヨクニ」には、ただ一つの意義しかないのである。

## 二

では、上代人の頭に描かれた常世の国とは、どのようなものであったか。一言にして言えば、それは富裕と長寿との国であった。そして、それは、何も漢意などから来たものではなくて、わが上代人の抱いていた夢の国であり、あこがれの国であり、理想郷であったのである。とかくこの世は住みにくい、憂いこと辛いことが多すぎる。どこか遙かな遠いところに、年中花が咲き、鳥が歌い、橘その他の果実や食物が豊富にあつて、何の苦勞もない世界がある、そこでは老若も若返る、長寿が保たれる。そういう世界へ行きたいと希求し想像したことである。この希求し想像した理想郷がすなわち常世の国であった。このことは古今東西を問わず、人類の自然に抱いた希望であろう。すなわち、シナでは蓬萊の概念となり、インドでは極楽浄土の概念となり、ギリシアに起り、ヨーロッパにひろがってユートピアの概念となった。これは、全く人間の自然の欲求であり、発想である。

常陸風土記の序文に、常陸の国は、土地が広大で、地味が肥え、

山海の利が多くて、人々が豊かに暮らし、家々がにぎわっていることを叙して、「古人曰く『常世之國、蓋此地。』」と述べているが、これは必ずしも、常陸の国がただちに常世の国だと言っているのではなく、このような楽土を、古人は常世の国と考えたのであろうというのである。これを見ても、上代人の常世の国に対して抱いていた概念の一端がうかがえるであろう。決して、黄泉の国や底つ国や根の国などの暗い境地ではないのである。

### 三

さて、常世の国は、わが上代人の頭に描かれた夢幻の国であり、理想郷であった。それを記伝などは、現実の地であるかのごとくに考えて、タヂマモリの行ったという常世の国を「此は新羅國を指して云へるなるべし、其故は、多遲麻毛理は新羅人の末なれば、其國に橋の有りて、甚美き菓なることを伝へ聞き居りて天皇に語り奏せしより、此の事は起りたるべければなり。」などと云ってはみたものの、少し変だと気づいたしく、次いで「なほ細かにいはば、橋は漢にても、南の方に在りて北の方の寒き國には無きものときけば、三韓などには、いかがあらむ。若し韓に無き物ならば、此の常世國は漢國を云へるならむ。」(卷二十五)などと述べている。伝説を史実と思ひ込んでいのである。書紀によれば、タヂマモリは常世の國への往復に十年の歳月を費している。往きに五年かかったと見て、帰りにも五年の歳月を費したこととなる。どんな橋の実でも、五年たったら、あとかたもなく腐ってしまうであろう。そんなものを垂仁天皇の陵に捧げたなどという物語が事実であろう筈はない。常世の國は断じて現実の土地ではない。これは恐らく遠い南方から橋の実が渡来したことにまつわる伝説の脚色されたものであろう。折口信夫博士は、その全集(卷二、三五頁)の中で、「出石びとの祖先

の一人たるたちまもりが時じくの香の木実を採りに行つたと伝へる常世の國は、大体南方支那に故土を持つた人々の記憶の復活したものと見る事が出来る。」と述べているが、これは記伝の説より多少前進しているにもせよ。やはり、常世の國を現実の地と考えているようである。そうではないのである。四面が海である日本として、理想郷を求めれば、それは、はるか遠くの海洋中にあり、しかも、太陽の光まばゆい、明かるい南方の島を想像したものと考へざるを得ない。ところで、こうした理想郷へ行くことは、決して容易なわざでないことを、上代人は考へたに相違ない。そこで、その地へ行くには、何か特別な水棲動物の助けによらなければならなかった。それは、もちろん、こうした理論めいたところから来たのではなくて自然の発想から生じたものであろうが、とにかく、その水棲動物は鱈や亀などであった。ヒコホデミの海宮(常世)行は、書紀の一書によれば、往復とも鱈であった。普通の伝では、塩土老翁が無目籠を作つて、それにのせて送つたことになっているが、これは恐らく後の発想であろう。一書では次のように物語られる。

弟愁吟在海浜二時、遇鹽筒老翁云々。老翁曰、勿復憂(吾將計之。計曰、海神所乘駿馬者八尋鱈也。是豎其鱈背而在橋之小戸。吾當与彼者共策上。

とあり、塩土老翁がその八尋鱈に相談すると、その鱈が、「自分は八日の後に天孫を海宮にお送りすることができるが、我が王の駿馬一尋鱈は一日のうちには必ずお送りすることができる。」と云つて、その一尋鱈を連れて来て、それにのせて送つたとある。帰途は、どの伝も鱈に乗つて来たことになっている。また、ヒコホデミの妃豊玉姫が夫君の後を追つて海宮から本土へ来るときには大亀に乗つてい。書紀の一書に、

豊玉姫、自馭大亀、将女弟玉依姫、光海来到。

とある。浦島子が竜宮(常世)へ行くときも、五色の美しい亀により、帰りに亀に乗って来たことは周知の通りである。すなわち、くりかえすまでもなく、常世の国は南方の海洋中にあると想像された島であった。それは、日本人の遠い祖先のうちのある種族が、南方からこの国土の南端にたどりついたことと関連するであろう。そして、橋の原産地や鶏の原産地がかれの故土または通過した土地であったことを物語るものでもあろう。常世の物語に最も多く出て来るのは橋である。鶏は「常世の長鳴鳥」だけであるが、鶏の原産地が東南アジアであることを思い合わせると、そこには看過すべからざる問題がひそんでいると言える。

タザマモリは橋の実を求めに常世の国へ行った。万葉では橋を「トコモノ」と呼んでいる。常世の国への往復の拠点は、日向の橋の小門という港であった。橋と常世は常につながる。皇極紀には、次のような説話が載っている。駿河の富士川のほとりに住んでいた大生部多という男が、橋の木に住んでいる毛虫を捕って来て、「これは常世の神である。この神を祭れば、富みと寿とを得る。」と称して村人をだます。巫覡たちが、これに便乗し、都鄙の民から多くの財宝を巻きあげる。これは、今日の新興宗教の類であるが、その弊害が甚しかったので、奏造河勝が大生部多を打ったので、巫覡たちも恐れてこの虫を祭ることをやめてしまったというのである。巫覡たちが民衆をだますときには、  
祭<sup>マツリ</sup>常世神<sup>トコモノノカミ</sup>者<sup>ノ</sup>、貧者<sup>ヒナシヤ</sup>致<sup>シ</sup>富<sup>トク</sup>、老人<sup>オトコノヲシ</sup>還<sup>カエ</sup>少<sup>シ</sup>。  
と言っている。ここにも、上代人が常世の国に対して抱いていた概念がうかがえる。そして、その虫(恐らく揚羽の蝶の幼虫であろう)が橋の木に住んでいるのである。すなわち常世と橋とは常につながっている。

#### 四

また、常世の国は鰐につながる。ヒコホホデミの行った海宮すなわち常世の国は、実は鰐の都とも言うべきものであった。鰐はヒコホホデミを海宮へ運び、また本土へ送っているが、海宮の王たる豊玉彦の正体も鰐であったとしなければならぬ。というのは、その娘である豊玉姫の正体が鰐であるからである。宮崎市の海浜にある小島の青島は、うっそうたる南方植物に蔽われているが、そこにはヒコホホデミと豊玉姫と塩土老翁を祀った神社がある。また、その対岸の少しく西南方の岩窟には鶴戸神宮があり、ウガヤフキアヘズを祀っている。豊玉姫は、ここでウガヤフキアヘズを産んだと伝えられている。古事記によれば、そのとき、豊玉姫は「八尋和邇」になって、「匍匐委蛇<sup>ヒコホホデミ</sup>ひ」つつ子供を産んだという。書紀の本文では、  
鰐<sup>ヒコホホデミ</sup>になつてゐるが、一書の方では、

豊玉姫、化<sup>カ</sup>為<sup>ニ</sup>八尋大熊鰐<sup>ヒコホホデミ</sup>匍匐委蛇<sup>ヒコホホデミ</sup>。

とあって、古事記の伝と同じである。この神婚説話は、鰐をトイテムとする氏族との婚姻を意味するであろう。このとき、ヒコホホデミは「見る勿れ」のタブーを犯して、妃と離別の憂き目を見るが、このことは、浦島子が「あける勿れ」のタブーを犯して、忽ち白髪<sup>カガハ</sup>の老人となるのと同じ趣向である。さて、この鰐を、かつて白鳥庫吉博士は「サメ」であるとし、今でもその説を奉じている向きもある。理由は、日本に鰐の棲息している筈はないところにある。これもやはり、伝説と事実とを混同しているからである。のみならず、太古の日本の近海や河川に鰐が棲息していなかったとするのも早計であろう。出雲風土記安来郷の条には、猪麻呂という語部の娘が和邇に殺された記事があり、肥前風土記佐嘉郡の条には、その郡の川上に住む世田姫のところへ、海から鰐がさかのぼって通

たという記事がある。時代は降るが、宇治拾遺(巻三)には、筑紫の商人が新羅へ渡り、その海岸で虎と鰐との格闘を自撃したという記事がある。また、現に今日、揚子江には鰐が棲息している。したがって、太古において、日本に鰐が棲息していなかったから伝説中の「ワニ」は「サメ」であるなどとも言えないのである。陸上ののぼって「葡萄透蛇ふ」のは「サメ」ではないし、海から川をさかのぼるのも「サメ」ではない。よしまた、日本に鰐がいなかったとしても、鰐のいる地方から伝播された説話の中に鰐が出て来ても、ならさしつかえのないことである。たとえば、因幡の白兔にあざむかれて復讐した「ワニ」は、明らかに南方から伝播された「ワニ」である。Oceanic Mythology に収録されている物語は、微細な点にいたるまで、因幡の白兔の物語と一致している。ただ Crocodile の上を「one」、「two」、「three」と数えながら跳び越えたのが白兔ではなくて、mouse-deer (角のない小型の鹿) に代わっているだけである。この系統に属する説話は極めて多いが、すべて南方から飛石伝いに島々を伝って、遠く北上しているのである。

神武紀によれば、稲飯命は紀の国へ行く途中で海の荒れたのを怒り、「ああ吾が祖は天つ神、母は海の神、いかにぞ我を陸に厄め、また我を海に厄むや。」と言って、剣を抜いて海に入り、鋤持の神となったとある。この鋤持の神は鰐の異名である。古事記(上巻)に、ヒコホホデミが海宮から帰るときに乗って来た鰐の勞をねぎらい、その頸に細小刀を着けてやった。それで、

其一尋和邇者、於今謂三佐比持神也。

とある。これは、鰐が鋭い歯を持っているところから来たものである。また、神武紀には稲飯命に続いて、三毛入野命もまた、「我が母と姨は並びに海の神なり。いかにぞ波瀾を起して灌漑らすや。」と言って、浪の秀を踏んで常世の国へ行ったとある。常世の国が、

はるか遠くの海洋中にあると想像されていた証拠であり、そこには多くの鰐が棲息していたことを物語っている。このことは明らかに南方につながるものである。ひとしくタカミムスヒの子と伝えられるオモヒカネもスクナヒコナも、共に常世の国がその故土である。したがって、タカミムスヒの住んでいたという高天原もまた南方につながる。天と海とは、同義語であろう。「アマクダル」は「海くだる」であろう。日本人の遠い祖先のうちのある種族が、日本の南端にたどりついたのは、きわめて自然である。

ついでながら、海幸・山幸のつり争いの物語もまた南方から伝播された説話である。前に挙げた書に、

There were three brothers and two sisters in the upper sky-world.

と「高天原に三人の兄弟と二人の姉妹が住んでいた。」から説き起して、ある日、釣りをしていた末の弟が長兄から借りたつりばりを無くする。兄がどうしても元の鉤を返せと責めはたる。弟が海浜にたずんで泣いていると、塩土老翁ならぬ、親切な魚が現われて同情し、ついに他の魚ののどにささっていた鉤を捜し求めて弟に与える。それから、弟がきわめて意地のわるい方法で兄に復讐する。――全く同一である。このように微細な点まで一致している説話は、決して偶然の一致であるとは言えない。

## 五

以上のように見て来ると、常世の国に関する伝説は、橘――鰐――つりばり争い――トートテムー――タブーと、南方とのつながりが強く浮かびあがるのである。そもそも、仙境淹留説話は、世界のいたるところに存在するが、孤島を仙境とする説話は、数千の島嶼の散在する南方海洋諸民族や、四方海に囲まれている日本民族な

どの持ついちぢるしい特徴である。書紀には、「蓬萊山」を「トコヨノクニ」と読んである箇所も少しあるが、シナ人の蓬萊に求めたのは不老不死の薬であつて、多少の類似点はあるが、必ずしもわが国の仙境淹留説話と系統や質を同じくするものではない。わが国の仙境淹留説話は、南方海洋民族のそれと全く同系統であり同質である。その原型は孤島漂着譚である。メラネシアのニューブリテン島に古くから伝えられている伝説の一つに次のようなものがある。

ある日、一人の男が鳥を捕らえようとして木にワナをかけた。すると、一羽の鳥がかかったので捕らえようとする、鳥はワナを外して海の彼方に逃げた。男は小船に乗って鳥のあとを追つた。かなり行くと、一つの孤島が横たわつていた。鳥はその島の木に止まつたので、男は上陸してその木の側へ行つた。すると籐の中から何かガサガサという音が聞えて来たので、男は気味わるく感じて、急いで木によじ登つた。見ると、木の下にはきれいな泉がこんこんと湧き出ていた。やがて、さっきの音が近づいたが、それは猛獣や毒蛇の類ではなくて、島の娘が泉の水を汲みに来たのであつた。その娘は泉に映つた影によつて、木の上の男を知り、ついにちぎることになる。男はしばらくこの島に滞在していたが、のち、この島に一つの船が着いたので、望郷の念にかられ、その船に乗つて家に帰つた。家では、その妻が永らく空闊を守つていたが、男が島の娘とちぎつたことを知り、一時にカツとなつて男を打ち殺してしまつた——という筋である。(生蕃伝説集、付録、南洋類話による)この説話はヒコホホデミの海宮行と全く同工異曲である。ただ、話が現実的であるだけである。これなどは、孤島漂着譚から多少前進しているが、多くは漁に出て暴風に遇い、やがて孤島に漂着する。家の者は死んだものと思つて墓まで造つていて、数年後に突然家に帰つて来た——という、全くの事実譚で、この類の説話は南方海洋諸島

から台湾の先住民族の間にまで広く分布されている。前掲のニューブリテン島の説話の片鱗とも思われるものが、書紀の一書に残つて  
いる。

是時、弟往<sup>カカリチ</sup>海浜、低徊愁吟。時有三川鷹、嬰<sup>カカリチ</sup>羈<sup>ニヤヤ</sup>困厄。即起<sup>ニ</sup>憐心<sup>ニ</sup>解而放去。

そこへ塩土老翁が来て、無目堅間の小船を作つて、ヒコホホデミをのせ、海の中へ押し放つ——という筋である。

つまり、仙境である常世の国の物語の原始的要素は、明らかに南方からの伝播であるが、わが上代人は、それを美しい夢幻の世界——理想郷にまで昇華せしめたのであつた。

最後に一言したい。以上のわたくしの論調から、日本民族の遠い祖先のうちのある種族が、マレイ人であろうとか、インドネシア人であろうなどと速断または憶断されてはならぬということである。

(終り)